

特別編集委員の目

昨年の8月末というところ、それは衆院選直前というよりは日本文理高校野球部の甲子園準優勝の直後という感が強い。私の妻などはテレビ前での応援のしすぎで体調を崩したほどだ。

しかしその日本文理ナインの活躍に対する評価のしかたがどうにも不愉快だった。彼らの健闘をたたえるにしても、もう少し別の言い方もあっただろうと思

たとえば泉田県知事、「決勝で見た粘り強さは県民の心に深く刻まれた」。篠田新潟市長は「驚異の粘りは新潟の誇り」。ついでにほかの人もあげれば、妻夫木聡さんは「あの粘り強い戦いぶりは上杉の昔と変わらな

い」。すべて本紙で紹介されたコメントである。

これらの人々に悪意はないだろう。一般的にも新潟の県民性は粘り強さという観点から語られることが多いのは事実だ。しかし、だからこそこうした表現が繰り返されることを問題にしたい。

昨年の文理ナインは決勝最終回の攻撃があまりに印象的だけれども、全試合通じてピンチの

新潟国際情報大
情報文化学部教授
越智 敏夫



おち・としお 1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大学講師。2006年に教授。専門は現代政治学理論。

県民性論のわな

つただろうと思

時も明るく、最後に敗れた時も快活な表情を見せていた。ところがそういうところはあまり語られることがなく、あいかわらず粘り強さばかりが強調される。知事は「彼らの明るさは県民を勇気づけた」とは言わないのである。

高校球児以外の深刻な例も出してみたい。自殺率だ。2009年の統計を見ると県内の自殺率は全国で6番目に高い。また新潟市の自殺率は全国の政令指定都市のなかで最悪である。こうした事態に各自自治体もさまざまな対策をどうとしていることは確かである。

ところがそれらに取り組み新潟市のある関係者は次のように語っている。「まじめで頑張り屋という市民気質もあって、ぎりぎりまで我慢して力尽きてしまつて側面があるのではないか。これは駄目だと思つた。これでは不まじめで頑張らない人間は新潟市民ではないかのようなうた。こうした発言こそ、人々を自殺

だからこそ「新潟人は粘り強い」と言われてきたことの意味は何かと問うてみたい。答えは単純で、それは新潟県民には粘り強さが強制されてきたということだ。

その背景には、故古厩忠夫氏が名著『真日本』(岩波新書)で活写したとおり、日清、日露戦争期以降、新潟のような地方からヒト・モノ・カネといった資源が関東圏へと移送されるシステムの構築があった。戦争のための総動員体制がつけられる過程で、新潟の人々にはひたすら低賃金労働に耐えることが要求されていったのである。

そのなかで粘り強い、寡黙、我慢強い、といった性向ばかりが強調され、押し付けられ、現在に至っているのだ。このように我慢強い大衆ほど権力者にとっては何かと問うてみたい。答えは単純で、それは新潟県民には粘り強さが強制されてきたということだ。

その意味では、知事や市長という権力者が「新潟人は粘り強い」と繰り返すことはやはり批判されるべきだろう。統治しやする者だけを新潟人と認めるのだと公言しているようなものだからだ。

今夏の新潟明訓も堂々たる戦いを見せた。もうそろそろ県民性という空虚な言葉遊びはやめるべきだ。これは国民性という、規模のより大きくグロテスクな議論でも同様である。

粘り強さばかり強調

ところがそれらに取り組み新潟市のある関係者は次のように語っている。「まじめで頑張り屋という市民気質もあって、ぎりぎりまで我慢して力尽きてしまつて側面があるのではないか。これは駄目だと思つた。これでは不まじめで頑張らない人間は新潟市民ではないかのようなうた。こうした発言こそ、人々を自殺